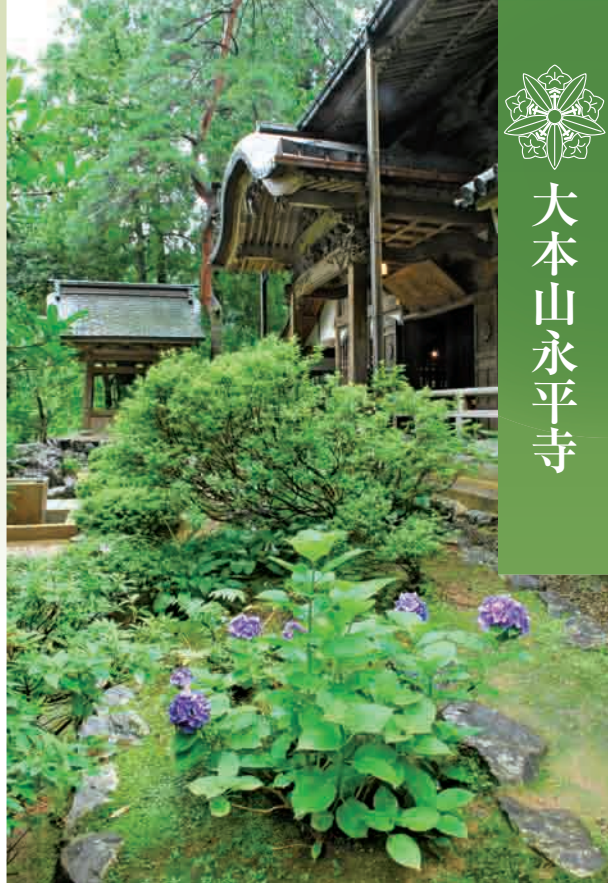




大本山永平寺



入梅

福井の六月は湿度が高く、永平寺は周囲を深い山に囲まれているため尋常ではない湿度を帯びます。

永平寺の修行僧たちは、この高湿度を経験するのですが、体力が少しずつ奪われていくことに、とても驚かされます。睡眠不足も重なり慢性的な気怠さがいばらく続きますが、だからといって修行がやむことはありません。

暑ければ冷房器具、寒ければ暖房器具、蒸し暑ければ除湿器具といった暮らしを入門前はあたりまえのようにしてきた修行僧たちですが、ここでの彼らには無縁の存在です。

しかしそのお蔭で「辛抱する」ことを学ぶとても大切な機会でもあります。

「辛抱」とは辞書を引けば意味は分かります。修行僧全員が理解していると思われる熟語ではありますが、それは知識であり観念でしかありません。「辛抱」は実際に辛抱してみないと分からないのです。

すべてが修行なのだと思いきな気持ちを持つ者には梅雨景色も鮮やかに映ることでしょう。



大本山總持寺



昨年の提唱風景

伝光会撰心

大本山總持寺のある横浜市鶴見区は六月になると、海から南風が吹き、梅雨の時期と相まって、高温でじめじめした気候になります。そんな中、本年は六月十一日から十五日の五日間、でんこうえっしん伝光会撰心が行われます。

ごかいざんけいざんせんじ御開山瑩山禪師は、お釈迦さまから正しく仏法が伝えられてきた様子を示すために、『伝光録』を残されました。『伝光録』は、曹洞宗の最も重要な聖典の一つです。お釈迦さまと五十二人の祖師方についてそれぞれ章を設け、お一人お一人の足跡そくせきや人柄が紹介されています。また、瑩山禪師の尊いお言葉も数多くちりばめられています。この『伝光録』の教えに基づいて実施されるのが、伝光会撰心です。

期間中は、山内の日課をすべて休止して、朝四時の起床から夜九時の就寝まで、大講堂で行われる一日二回の禪の提唱ていしょう以外は、僧堂の中で坐禅に集中します。この期間食事は、すべて施主の方がたからの供養によってまかなわれます。また例年一般参禅者が参加され、修行僧と一緒に坐禅をします。

この春上山したばかりの修行僧にとっては、初めての長期撰心で、厳しい禅修行の五日間となります。これが終わると、本格的な夏の修行が始まります。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

雲雀落つ高原に啼き疲れ

島根県 藤江 堯

評 神々の話に始まる古事記は編纂されて今年で一三〇〇年。その神々の住まう高原。雲雀は高きに上り神様たちを、また地上の働く民、災害に立ち向かう民たちに美しい声で囀り慰める。ひたすら啼き、今日のエネルギーを使い果たし、落ちるがごとく下りて来る。

旧暦も祝つてやりぬ古雛

山口県 糸山 栄子

評 新暦の三月三日も過ぎてしまった。お雛さまは母上のころかもう少し前か。時代を経た味わいはよいもの、このまましまうも心が残る。そんな思いが旧暦までとなった。古雛への愛情の細やかさが伝わる。

◆ 春愁のひとつ二つは風が解く

東京都 藤橋 眞子

◆ 飾るのも見るのも一人古雛

長崎県 林 百合子

◆ 女正月おきつねの紅アイライン

愛知県 松井 暁美

◆ 囀りや歩いていたいその日まで

兵庫県 本間しずよ

◆ 廃校の余儀無き村に燕来る

秋田県 小田篤恭葉

◆ 雪の上に顔を画きたる下校かな

新潟県 吉楽 正雄

◆ 啓蟄や折鶴に息吹き込んで

兵庫県 美濃 敏子

◆ 春立つや舳ひ解きたる屋形船

岩手県 鈴木 道昭

◆ 隣から鼻歌聞こゆる春の宵

東京都 福島 秀雄

◆ 梅香る山の奥にも寺の庭

静岡県 漣 徳 潭

* 選者吟

十葉や蔵の古きを相競ひ

五灰子

* 作句小見

福井県三国町東尋坊の崖上に三基並んだ句碑がある。どれも人の丈以上の高さ。見渡せばすぐに見つかります。

野菊むら東尋坊に咲きなだれ 虚子

雪国の深き庇や寝待月 愛子

日本海秋潮となる頃涼し 柏翠

虚子の小説「虹」の主人公たちです。昭和四十年建立

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

農やめて農機処分す大納屋の土間に残るは
ねずみの骸むぐら

福島県 西木 甚

評 高齢のため、農業を続けることが難しくなり、後継者もなく、やむを得ず農機を手放すことになった、その無念さが結句の「ねずみの骸」に象徴的に滲み出ている。また「大納屋」には壮年期の作者の活力溢れる様子も窺える。

菜の花に色をとられて春の夜はおぼろ
に浮かびたるかも

福岡県 三吉 誠

評 菜の花の黄の鮮やかさを、春のおぼろ月夜と対比して、機知に富んだ歌である。一首の主役は、あくまで「月」であるところも気が利いている。

◆ 当り前の暮しに幸あり妻の居て小さき畑に薯いも作りある

宮城県 荒川 庄助
◆ 老いわれを見舞うがごとくわが庭にヘリコプターが影落
岩手県 池田 眸

◆ 春を呼ぶ声ひびかせて朝明けの茜の空を白鳥わたる

秋田県 伊東 スエ

◆ 手裏剣のごとき飛魚きらめきて空と海との間まを飛び交ふ

福島県 大槻 弘

◆ 地吹雪に籠るほかなき昼つかた賜ひたりける寒鱈一本

秋田県 佐藤 和子

◆ 三陸の春の光を浴びながら海猫は鳴き漁夫は船出す

東京都 野村 信廣

◆ 屋根みれば陽はまだあれど家族らが夕餉待つかと鋏をお
きたり

静岡県 岡田ときえ

◆ 息子が逝きて半年すぎし引き出しに時計は静かに時をき
ざみて

新潟県 渡辺 スイ

◆ 杉並木風吹くたびに古枝をふるい落して道の明るし

静岡県 土屋 君江

◆ 幾夜さをかけ縫い上げし六地藏の帽子前掛け並べかぞえ
る

兵庫県 前田あつ子

* 選者詠

風に乗り日和山まで流れ来しあれはたしか
に鎮魂の鐘

ちづ

* 作歌小見

石巻市の日和山公園から津波の被害を受けた一帯を見渡していた時のこと、雨こそ小やみでしたが強風に飛ばされそう
な中、鐘の音が流れてきて、私たちは思わず黙禱を捧げまし
た。

後日談では、単に火災予防の消防署の鐘だったとか…。